

統合的ライフプランニング(ILP)概念における労働観の一考察

—ILP 概念におけるスピリチュアリティと日本的霊性の比較から—

植 村 雅 史

I 序

一定の思想や概念が新たに採用されるときには、それを受容するための素地が整っていることが前提となることは、夥多の実例に徴して説明するに及ばないであろう。それと同時に、採用されその地にしっかりと土着するまでには数多の困難を克服することが必定とされてきたことも事実である。本稿ではキャリア・カウンセリング、キャリア教育、多文化間カンセリング等を専門領域とするミネソタ大学名誉教授 Sunny Sundal Hansen 氏の提唱したキャリア概念「ILP (Integrative Life Planning 統合的ライフ・プランニング)」を取り上げ、それが現代日本文化において受け入れられるための素地についての考察を試みようと思っている。あえて簡潔にいうならばハンセンの概念は6つの主要な課題によって構築されているのだが、そのなかのひとつに「スピリチュアリティ(精神性・魂・霊性)と人生の目的の探求」という課題がある。ここでは氏の提唱する「スピリチュアリティ」が現代日本文化に出合うときに、それがはたして日本独自の素地のもとに解釈することが可能か否かを検証するところにその目的を置くこととなる。すなわち、そこにこそ日本の文化に誤解なく ILP 概念が土着するうえでの鍵が潜んでいるのではないかと仮定しているのである。

II ILP (統合的ライフ・プランニング) という キャリア概念

1. ILP 構築に至る背景

キャリア理論家でもありカウンセラーでもあるハンセンは、カウンセラーの将来像としてクライアントが仕事というそれまでの狭義のキャリア内に収まることなく、ライフキャリアという視点に

おいてバランスのとれた人生を実現することを企図する支援のために ILP (Integrative Life Planning; 統合的ライフ・プランニング) という概念を構築した。そしてその目的を、『キャリア開発と統合的ライフ・プランニング¹⁾』のなかで、1980年代以降に多くの学問分野で進んできたパラダイムシフトを紹介しながら、「キャリアとライフ・プランニングのパラダイムシフトが必要」であり、「特性因子理論」と呼ばれる伝統的かつ論理的・合理的なマッチング理論が存続しつつも、「社会—地球の規模と国家的規模の両方での-, 仕事, 家族, 教育, 人口動態, あらゆる背景の女性と男性の役割と人間関係が劇的に変化したことにより, キャリアの専門家は, クライアントが複雑で難しい人生選択と意思決定ができるように支援するための, 新しい方法を確立する必要」があり, 現代社会が直面している「自然環境の悪化, 人権, 多文化主義, 暴力などの問題が, キャリア・プランニングのための新しい哲学を要求しており, そこでは個人的な満足感と安定した生活のための個人的職業選択ではなく, 個人の全体性のみならず, 意味ある人生, すなわち自己とコミュニティの両方にとって有意義な仕事のための, 生涯にわたる多面的な選択に重点が置かれるべき」と考えるためとしている。

このことからわかるように、ハンセンはキャリアの広義の概念を提唱したドナルド・スーパーの理論を自身の理論的背景としている。なかでも、スーパーが個人における自己実現とともに社会の福祉への貢献ということを挙げていたことに注目していたことが、氏の研究の基盤を成しているといえよう。

2. ILP の概要

ハンセンは ILP を「発展途上にある概念²⁾」であると前置したうえで、「人々を支援するキャリアの専門家が、人々の人生、コミュニティ、そしてさらに大きな社会の「全体像 (big picture)」を見ることができるようにするための、人生の多くの側面を統合した包括的なモデルである」と定義している。そして、この概念を説明する比喻として「キルトとキルター」を用いている。いくつかのピースが縫合されることでひとつの作品となるキルトを個人の人生に見立てたうえで、その人生のキルトを縫い合わせてつくっていく人間をキルターとしたのである。この人生という名のキルトにおいて重要と思われるピースを6つ挙げて詳論することになる。「変化するグローバルな文脈のなかでなすべき仕事を見つける」「人生を意味ある全体のなかに織り込む」「家族と仕事をつなぐ」「多元性と包含性に価値を置く」「スピリチュアリティ (精神性・魂・霊性) と人生の目的を探究する」「個人の転換 (期) と組織の変化のマネジメント」の6つである。それぞれを要略的に紹介すると以下のようになる。

「変化するグローバルな文脈のなかでなすべき仕事を見つける」とは、いわゆる「適職」といった定点的な視角における従来型の仕事探しという発想ではなく、現代社会が地球的規模において直面している諸問題の解決を基盤にしたうえでの仕事の選択や決定を求めるということである。そこで技術の建設的利用の促進、環境保全、職場における変化の理解、家族における変化の理解、暴力を減らすこと、人権擁護、ジェンダー役割の変化の受け入れ、多様性への価値転換、スピリチュアリティと人生目的の探索、知の新たな獲得方法という10種を取り上げて検証している。つづく「人生を意味ある全体のなかに織り込む」という課題では、仕事や職場での役割におけるキャリア・プランニングといった限られた視角にとどまっていたことで取り上げられることのなかった、社会的、知的、身体的、情緒的、精神的な要素を基にした人生役割に着眼している。「家族と仕事をつなぐ」

では、男性女性のジェンダー役割と両者の関係性におけるジレンマによって引き起こされる家族と職場のストレスケアの方法として、パートナーシップという観点でとらえることの重要性に言及している。「多元性と包含性に価値を置く」では、人種、民族、階級、宗教、ジェンダー、年齢、障害、出身地域、性的指向などの違いといった多様性の理解にとどまることなく、それらを受容し価値を認めるような支援の必要性が強調される。そして「スピリチュアリティ (精神性・魂・霊性) と人生の目的を探究する」では、それまでのキャリア発達に関する文献ではその俎上に上ることの少なかった「スピリチュアリティ」という視点を、「人生の意味と目的、すなわち人生に意味を与える自己の中核をなすもの」ととらえたうえで、それが社会、コミュニティへの貢献を支える重要な概念であること説明している。最後の「個人の転換 (期) と組織の変化のマネジメント」においては、転換期では個人としての意思決定は何をおいても求められるものではあるが、そのような受動的な見方だけでなく、個人が組織や家庭における変化の担い手となることの能動性についての理説が展開されている。

III ILP における「スピリチュアリティ」と「仕事」

1. 「スピリチュアリティ」の定義

ハンセンはこの「スピリチュアリティ (精神性・魂・霊性)」という要素を、一意的な定義を得ることがむずかしく、かつ観測も測定もできず科学的根拠がないという理由から「これまで、キャリアとライフ・プランニングでしばしば無視されてきた」課題であったが、それを「仕事における意味と目的という概念と共に検討し」ながら21世紀のキャリア理論に包摂する必要性の根拠をクライエントの意思決定のためだけではなく、「カウンセラーとキャリアの専門家」の人生においてもその理解が求められることとしている。それは、「変化と不確実性」「トラウマと危機」「人生の過酷な障害」の対処に重要なピースであり、「人生の意味と目的

を探究している人々にとっての希望の源泉」になるととらえられ、1990年代から「スピリチュアリティ」とカウンセリングに関する論文が増えていることを、クライアントが「人生のスピリチュアル」な側面に関心を抱いていることを量的調査にて検証した **Bergin** の研究や文化的価値観を集団、家族、コミュニティを重視する文化と個人重視の文化において構造的に比較研究した **Pate** と **Bondi** を引いて説明している³。

そのうえでハンセンの定義する **ILP** における「スピリチュアリティ」とは、「宗教と区別して考えることが重要」であるという前提の下、「自己の外側のより高次元の力の存在を想定」し、**Yates** の「人の中核=意味、自己、そして人生の理解が生じる中心」、**Boorstein** による「宗教的信念とは関係のない、統合と全体性の経験」、また **Kratz** の「深い統合性、全体性、人生のすべてがつながっているという感覚」といった定義に通底する「全体性」というテーマでとらえられている。くわえてこの「スピリチュアリティ」という概念は、なにも90年代以降の新しいものではなく、初期の理論家のなかにもその重要性を説いていた先達が複数存在したことも紹介している。そのひとは精神科医の **Viktor Frankl** である。彼はロゴセラピー (**logotherapy**) 理論を提唱するにあたり、それが個人の人生における意味を発見することの支援手段であると示唆している。同様に **Abraham Maslow** も「われわれの存在の中核にはスピリチュアルな価値観があり」、「それはわれわれを、人間存在として全面的な発達を可能にする選択を行うように促し、同時に自然とのより深い調和へと向かわせる」と妙教に達した論を展開している。そして **Carl Rogers** においては、実存主義的傾向を強めていった後期に「全体性」を現象のなかに内在する関係性から見出し、人間存在の「全体性」を信念、感情、知覚、価値の連関によって掴もうとしたことなどを挙げている。

2. 「スピリチュアリティ」への懐疑

このように米国においては1980年代あたりから

徐々にキャリア理論のなかに、「スピリチュアリティ」という概念が取り入れられるようになり、90年代以降にはキャリアの理論家以上に実践家によってそれを重視する機運が高まっていったという経緯がある。他方21世紀に入った現在においても、宗教性の含まれる語として解釈される傾向があることなどからネガティブかつ不分明な印象が抱かれ、誤解が生じ、挙句敬遠されることがまだまだ多く見られているという現実もある。それは、「スピリチュアリティ」という語がもつ多義性による印象論的な懐疑性はその入り口に存在すると想像するのだが、より本質的な抵抗感というものはさらに奥まったところにあると考えられる。つまり、この抵抗感やある種の嫌悪感というものは二重の構造によって形成されているのである。本質的な抵抗感や嫌悪感を生じさせる要因は、「スピリチュアリティ」の語は、おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的につながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすることを指す⁴という哲学的領域に踏み込むものとなり、それが個人におけるキャリアという現実生活に即した文脈とは交差することのない概念ととらえられることが考えられる。言い換えれば、現実世界に形而上学的な概念を持ち込もうとすることで、うまくその連関を形成することができないことから生じる拒絶感のようなものである。

たとえば自分のワークキャリア、平易にいう将来的な仕事上のキャリアを考えるうえで、どうして宇宙との一体化やら大自然との神秘的つながりなどといった非日常的な体験が必要になってくるのか、そのつながりがあまりにも飛躍していてワークキャリアを考えるうえではまるで必要のない概念と成り下がる。むしろそれを持ち出すことで、時間の無駄でさえあるという直感すら芽生えるのである。ただ、**ILP** における「スピリチュアリティ」概念の核は「人生の意味と目的」ということである。たしかに、これを追求していくときには

形而上学的な領域に入っていくことになるかもしれないが、常にそれに先立って置いておかななくてはならないのは、その「人生の意味と目的」というテーマなのである。そう前提することで、決して直線的にその答えを見つけることは容易ではないかもしれないが、直感的印象においては目を伏せたくないような非日常的な対象とはならないであろう。すなわち自身のワークキャリアを考察することと、その基盤として「人生の意味と目的」「人生における価値観」という人生観を思惟することには、密なる連関があるということに納得がいくであろう。

そのように考えると、この「スピリチュアリティ」という語がもたらすネガティブな印象の形成という状況を回避する方法は、「スピリチュアリティ」という語を別の表現に置き直すこと、より日本文化において適当な言葉に置換することがそのひとつなのかもしれない。つまり、クライアントおよびキャリアの専門家が胡散散に思わずに済む語を用いるということである。しかしはたしてそれが後述する「霊性」という語であるのかどうかは、また別の機会に考えてみたいと思う。

3. 「仕事」の区別

この「スピリチュアリティ」と「仕事」というものを、その関係性のなかで吟味していくときにひとつ注意しなければならない点がある。それは「スピリチュアリティ」を「仕事における意味と目的」という概念と共に検討するという課題のなかで用いられる「仕事」という語についてである。後述することになるが、この「仕事」という語のもつ意味合いはいたって狭い定義におけるものであるということである。すなわちそれは、近代以降の資本性社会における「仕事」ということである。しかし労働過程史に現れる「仕事」という語はもっと広がりのあるものとして扱われる。たとえば、人間生活という全体性のなかでの営みとしての「仕事」といったものである。このとき「仕事」は「労働」という語に置き換えてもよいのだが、「スピリチュアリティ」を「仕事における意味

と目的」という概念と共に検討」といった場合、人間生活の営みとしての広い意味での「労働」とそこに内包されている狭い定義における「労働」の双方についてを対象として、その「意味と目的」と「スピリチュアリティ」との関係性において吟味するということではなく、「スピリチュアリティ」を狭い定義としての「仕事における意味と目的」という概念と共に検討」することになるのである。なぜなら、広い意味での「労働」が人間生活という全体性のなかでの営みとしての「労働」ということであれば、それはまさに人生そのものと言い換えることができ、その探求対象は「人生の意味と目的」すなわち「スピリチュアリティ」となるのである。つまり、広い意味での「労働」は「スピリチュアリティ」と同義ということになるのである。とすれば「スピリチュアリティ」を「仕事における意味と目的」という概念と共に検討」という課題は、「広い意味での労働を、狭い定義での仕事における意味と目的」という概念と共に検討」ということと表現できることになる。となるとこの何気なく使っている「仕事」という語を、ここで明確に区別しておかなければ、「スピリチュアリティ」と「仕事」の連関を説明していくうえでは混乱や矛盾が生じてしまうのである。

以上を整理するとこうなるかもしれない。「スピリチュアリティ」と「仕事における意味と目的」とは、「人生の意味と目的」と「狭い定義での仕事の意味と目的」であり、それは「広義の仕事の意味と目的」と「狭義の仕事の意味と目的」と換言できる。同時に後者は「労働観」としか置換できないものだが前者についてはそれを「人生観」とも「労働観」とも表すことができるものである。

IV 日本における「スピリチュアリティ」

1. 「日本的霊性」

いよいよここから現代日本における「スピリチュアリティ」概念の適応について論じていくことになるわけだが、本章では日本における霊性研究の原点ともいえる鈴木大拙の『日本的霊性⁵』をとりあげることで、今昔の日本人に貫通する「霊性」

を抽出してみたいと思う。ちなみに大拙のいう「霊性」は、科学者かつ神秘主義者であったイマヌエル・スウェーデンボルグの使用した **spirituality** を「霊性」と翻訳したところからはじまり、今日的な意味での「霊性」はこれが最初の用例といわれている。そして氏は大きなとらえ方をした場合、「霊性と言うといかにも観念的な影の薄い化物のようなものに考えられるかも知れぬが、これほど大地に深く根をおろしているものはない、霊性は生命だからである⁶⁾」とひとつの定義を表している。つまり「霊性」とは「命」そのものであって、「人生の源」ととらえているのである。なお歴史学的にみた場合、この「日本的霊性」が覚醒したのは浄土教ことに真宗が爆発的に広がった鎌倉期のことであり、真宗のなかに含まれている「純粹他力」と「大悲力」がその鍵であったという。しかしそれはあくまでも覚醒期のことであって、この「霊性」がそれ以前から日本民族のなかに存在していたのは紛れもないことであり、それは仏教が日本に土着したことをもって証明できる。すなわち「霊性」という素地があったからこそ、外から入ってきた仏教が日本的風土化してのち日本仏教として根付いたということである。つまり大拙は「霊性」は日本に古来から存在していたが、その覚醒は鎌倉期まで待つこととなり、またその覚醒期である鎌倉期こそが「日本的霊性のもっている最も深奥なところが発揮せられた時代⁷⁾」であると考えているのである。

そして氏は、たとえば精神と物質が二項対立としてある西洋哲学的な見方に立ったときには、この精神と物質という二つが相互に融合しあうことはないのだが、このような「二つのものを包んで、二つのものがひっきりずるに二つでなくて一つであり、また一つであってそのまま二つである」すなわち「二元的世界が、相克しないで、互譲し交歓し相即相入する⁸⁾」ための背後の器のようなものが「霊性」であるといっている。したがって感覚的には「霊性」という語には、「精神」という語が置き換えられるように思われるのだが、氏の説いた「霊性」とは「精神」とは異なるということ

を踏まえておく必要がある。それはこういうことである。「精神には倫理性があるが、霊性はそれを超越している。超越は否定の義ではない。精神は分別意識を基礎としているが、霊性は無分別智である」ので、「霊性」とは「精神」よりも高次のものなのであるということである。

2. 「日本的霊性」とキャリア概念

さらに大拙はすこぶる高次のものである「霊性」とは、高いレベルでの「宗教意識」ということもできることより、鎌倉時代などのように貴族政治から武家政治へと移行行く政治的変革や荘園制の崩壊にはじまる生産構造の変化といった経済的な変容、二度の襲来があった元寇などによる社会的動揺などといったなんらかの大きな機縁なくしては覚醒しえない類のものであると考えていた⁹⁾。ということは逆説的に考えれば、現代においてはその「日本的霊性」の深奥は発揮せられてはおらず、平安期以前と同様とはいわずともその「霊性」に気づかずに生活している人たちが多い時代といえるのかもしれない。となると現代日本においては、ことさら気づいてもいない「霊性」などというものをわざわざ持ち出さずにキャリアを構築することはいたって当然の帰結ともいえる。そしてそのような前提においてキャリア形成は、実際的には成立しているともいえるのである。そのキャリア形成論に蓋然的な信頼性があるかどうかは別としても、一見成立しているということは、特にその理論に「霊性」という概念を含める必要性は低いという論理にすり替えられても仕方がないのかもしれない。つまり「日本的霊性」というものは、現代人においては日常的に実感するものでなく、どこか非常に遠い対岸のもの、諒解するに尋常ならざる困難を伴うもの、よって宗教に帰依していない大方の人間にとっては、それをほぼ実感することなく死を迎えてしまうようなものである。そのくらいに現代日本においては、とても非日常的な事象であるということである。そのような非日常的な思惟を施してまでキャリアを考えようとするれば、自ずと迷路にはまり込むのは必至というこ

とになるのかもしれない。とすればキャリア構築においてこの「靈性」という概念を付加するのは、かえって混乱をきたすだけであって、百害あって一理なしということにでもなるだろうか。そのような理屈でとらえれば、ILPにおける「スピリチュアリティ」を「日本的靈性」と置換するのは間違いということになってしまうかもしれない。宗教性の根付いていない日本において、「靈性的直覚」¹⁰が得られる人、「靈性」というものが腑に落ちるものと実感しうる人は（それはあくまでも体験を条件にしているのではなく、観念としての理解でも構わないが）、さして多くないだろう。仮にそのような交渉のできる人間であれば、キャリア構築に際して「靈性」を含めることはとても有用なことであろうが、そうでない場合はあえて現出させない方が良い概念かもしれないという仮説が立つかもしれない。

しかしその論は、はたして成立しているのだろうか。そのように直截に判断して良いのだろうか。否、この「日本的靈性」とはILPで使用されるものと根源的には同義なものなのではないのか、すなわちILPにおける「スピリチュアリティ」も「日本的靈性」も相同ではないだろうかと考えたいのである。未だここにおいては仮定段階ではあるが、最終的にはその結論へとたどり着きたいと願うのである。そして仮にそうであるならば、それがキャリア理論への付加の可否を問う根拠は、宗教意識の有無、もう少し弱い表現をすれば信仰意識の強弱の差異ということになると想定される。なれば「日本的靈性」の特性を社会史的な意味での宗教や信仰ということではなく、個人的な「信仰」「生命」「人生の源」という面からとらえることでその端緒がみつかるかもしれないとは考えられないだろうか。そして現状の多くの理論にこの「靈性」を含めることができれば、さらに理論としては深化するのではないだろうかと考えたいのである。

3. 「日本的靈性」の特性

大拙は「日本的靈性」の特性を説明するうえで、

「妙好人」という「浄土系信者の中で特に信仰に厚く徳行に富んでいる人」¹¹を挙げている¹²。そしてこの「妙好人」とは、「学問に秀でて教理をあげつらうというがわの人」ではなく、「浄土系思想をみずからに体得して、それに生きている人」であるので、まさに大地に根ざした人物であり「靈性的直覚」の昇華に達しうる存在なのである。そこで氏は彼らを通して「日本的靈性」の円環的な特性を説明している。

日本民族の「靈性」の円環的な特性とは、「あるがままのある」「一周回って元の位置」または、「宗教性を究極的に追究した果てに日常に行き着く」¹³といったものであるという。たとえるならばこういうことであろうか。「競争社会」や「資本主義社会」への拒否、否定という意見をもつにしても、競争する、生産経済の只中に飛び込むという経験をせずに、観念的に「競争」や「生産経済」における「悪」の要素を論じてのそれでは、真の意見とはならず「靈性」にはまったくたどり着かない。いささか現実的すぎる喩えを用いるとすれば、現代社会の受験制度というものがわかりやすいものかもしれない。「受験」という競争世界を経験することなく、それから回避したところに身を置いて「受験」の「悪」を語っているだけでは「受験」という事象の本質にはいたらないということである。それに対して、仮に「受験」が「悪」であるという考えにいたるにしても、実際にその「競争」の環境に没入し、体験し、そしてここが最も大切であるが「競争」という原理において、一度は勝者となり勝ちを経験したうえで失敗を経験する。つまり実際に勝ちと負けの双方を経験することが前提となり、そのうえで「競争」という事象の否定に到達することで、その本質によく近づくことができるということである。そのとき結論としては観念だけのものであっても、経験ののちにたどり着いたものであっても、「競争の否定」という同じ記述となる。しかし観念だけのそれと「一周回って元の位置」にたどり着いたそれとは、その実はまったく異なるものなのである。そしてその経験は円環であるが、決して二次元の

円環ではなく螺旋状に深まっていく円環となるのである。この考え方はプラグマティズム形而上学においてウィリアム・ジェイムズが『宗教的経験の諸相¹⁴』で述べている「二度生まれ型」と「一度生まれ型」という宗教的人格の言説において「二度生まれ型」により価値を高く置いていっていることが相似のものといえるかもしれない。

キャリア構築というと、とかくいかに将来的な計画を自己実現に向けて効率性を重視し、失敗のないものとするかという前提のうえに立脚すべきもののようにとらえられがちであるが、日本的霊性的解釈を基盤とした場合は、まったくその逆ということになるかもしれない。一周して戻って来たとき、すなわち円環をたどって来たときには必ず肯定的な体験だけでなく、否定の体験、失敗の経験が伴うのである。これは見方によれば非効率的な実体験であり、否定体験の絶対的必要性のうえに立ったキャリア構築といえよう。そしてその一周の経験を経てたどり着いた位置から、また次のステージが開始されることの連続性において存在するものという解釈ができるかもしれない。

V 「スピリチュアリティ／霊性」と「仕事／労働」

1. 「人生観」と「人生目的」

キャリア・ディベロップメントに向けた ILP のアプローチは、「変化するグローバルな文脈のなかでなすべき仕事を見つける」「人生を意味ある全体のなかに織り込む」「家族と仕事をつなぐ」「多元性と包含性に価値を置く」「スピリチュアリティ（精神性・魂・霊性）と人生の目的を探究する」「個人の転換（期）と組織の変化のマネジメント」の6つの課題を包括的に考察するものであり、本稿においてはそのなかの「スピリチュアリティ」と「仕事」、言い換えると「人生目的」と「労働目的」の包摂的な連関に焦点をあてようとしている。

如上「スピリチュアリティ＝人生目的」については、従来のキャリア・ディベロップメントにおける理論と実践のなかではあまり重要視されていない課題であったのだが、90年代以降米国を中心

としてその必要性が唱えられ始め、「人生の意味や目的」という実定的には存在しえないものを、「スピリチュアリティ」という概念でとらえるようになってきた。そのことで、キャリアという概念が「仕事」という狭い視角だけではなくその「仕事」を考えていくうえでそれを包摂した「人生」、あるいは「人生」に前景化したものとしての「仕事」という連続性において認識されるようになってきた。結果、それまで重視されることのなかった自らの「人生」という全体性を「スピリチュアリティ」という切り口から見つめるようになり、そこでは宗教性とは異なる思想史的なアプローチを用いて、自分自身の「人生観」を記述することが求められるようになった。そうすると当然個々人が重きを置いている「価値観」によって多様な「人生観」が存在することになるのだが、もちろんそれらに対する類型化や評価の必要性は発生しない。この作業において求められることは、それまでぼんやりと頭のなかに観念としてとどまっていたものを言語化し、明確な「人生観」を確立することである。いや厳密に言えば、「人生観」を確立するということはそれほど容易なことではないので、暫定的な「人生観」を現象化させるという方が適当かもしれない。

ちなみに「人生の意味や目的」とは、決して科学的知識による合理的な回答を求めるものではない。それはどういうことか。「人生」すなわち「生」を考えると、まずはその終焉となる「死」を見つめることで「生」を浮かび上がらせるという転回、すなわち死生観という考え方があるが、たとえばこの死生観において「死」をとらえようとする。仮に最愛の人が眼前で死んでしまった場合、人は何を思い、何を考えるのか。おそらく最愛の人にとっての「死の意味、目的」はいったい何であるのかを考えることであろう。そこで記述される疑問は「どうして死んでしまったのか」「どうして死ななければならなかったのか」というものである。それに対して導き出そうとする回答が、「癌の全身転移が死亡理由」とか「出血多量が死亡の理由」というような因果論であることはない

だろう。そこで求められる答えは科学的でも合理的でも先進的でもなく、すこぶる非科学的、非合理的であり後進的なものなのである。翻って「生」の「意味、目的」をとらえるうえでも同様のことが現象することになるのである。つまり、「スピリチュアリティ」において「人生の意味や目的」をとらえようとするときに求められるものは、殊に自然科学的な知識ではなく自然哲学的な思惟なのである。

2. 「狭義の労働」と「キャリア」

その暫定的「人生観」に基づいて、今度はそこに前景化する己にとつての「仕事」というピースを記述していくことになる。そしてこの「仕事」というキャリア、いわゆるワークキャリアについては従来のキャリア・ディベロップメント理論においてはその中心に位置付けられてきたものであったことから、科学的方法での考察が行われる土壌はつくられているといえよう。しかし、ここで一度その理論の基盤をなしているものを確認しておく必要がある。つまりこういうことである。これまで本稿では「仕事」や「ワークキャリア」といったワーディングで論を進めてきたが、実はこの「仕事」「ワークキャリア」というものの背景には、近代資本性社会という貨幣経済を基盤とした資本性商品経済の社会が存在しており、自らのキャリアにおける「仕事」の位置付けを図るときには、このことに着目したうえで考察していく必要があると考えるのである。なぜならこれまでの文脈における「仕事」という語は、労働過程史においてとらえ直した場合には「狭義の労働」に相当するものだからである。しかし同時に、III-3（「仕事」の区別）で少し触れたことだが、「狭義の労働」に対して「広義の労働」というものも近代以前より存在しているのである。「広義の労働」とは、資本性商品経済社会によって労働と生活が切り離されるまえの未分化状態の労働である。すなわち「非商品経済的に生産され、また消費される¹⁵⁾」はたらし、価値化されない労働のことである¹⁶⁾。そもそも前近代においては「狭義の労働」

という概念が存在していなかったわけで、それと対照的な「広義の労働」といった考え方もなくそれが単なる「労働」というものであった。

現代日本においては、「仕事」というと一般的には「狭義の労働」がほとんど自動的にその対象となってしまうものだが、「仕事＝狭義の労働」を考えていくときには「労働」とは2種類のそれから成立しており、この近代以降の生活の手段のための労働がいわゆる「労働」として位置付けられるようになり、それが「狭義の労働」となっていくという労働過程論を踏まえることを忘れてはならないのである。ちなみにマルクスが『資本論』のなかで、この「狭義の労働」を問題にしていることは言うに及ばないのだが、『資本論』以前に書かれた『経済学・哲学草稿』で問題視した「疎外された労働¹⁷⁾」すなわち「労働者が骨身を削って働けば働くほど、彼が自分に対立して創造する疎遠な対象的世界がますます強大となり、彼自身が、つまり彼の内的世界がいよいよ貧しくなり、彼に帰属するものがますます少なくなる¹⁸⁾」といったいわゆる「労働疎外論」や、そこから連続して徐々に人間らしさを失っていく、遂には自分が何者でもなくなっていくという喪失感を表したドイツ観念論におけるフォイエルバッハの立場を乗り越えようとした「人間の自己疎外」という理論も、キャリア・ディベロップメントにおける個々人の「労働観」を記述していく作業においては、「狭義の労働」を考察する段において示唆を与えるものであろう。その理由を次節で考えてみることにする。

3. 「広義の労働」と「人生観」

キャリア・ディベロップメントにおける「仕事」「ワークキャリア」というものは個々人の「労働観」であって、その「労働観」はこれまで直線的に「狭義の労働」について考えることであった。しかしそれを追求するためにも、「広義の労働」すなわち生活と切り離されていないもうひとつの「労働」というものを記述することが必要になってくる。前節を整理するとこのようになるのだが、

なぜそれが必要なのかといえ、競争社会での身の処し方といった狭い視角のなかにおいてのみ「労働観」を探ろうとすると、どうしても偏執的でいびつなものになってしまう。すなわち「狭義の労働観」に焦点をあてるだけでは自縄自縛におちいり全体性を見失うことになるのである。そしてその偏りを是正するためには、「狭義の労働観」とは「人生観」という全体性に内包されうるものということを第一段階として考える必要がある。そして同時に、「人生観」のなかにはもうひとつの「労働観」である「広義の労働観」も包蔵されているのである。つまり「労働観」には「広義の労働」「狭義の労働」の二つがあり、それは「人生観」のなかに内在しているのである。そしてそれらは、その価値が「使用価値」から「交換価値」へと変容していくことで、「狭義の労働」は「広義の労働」から分化してきたという労働過程史のうえに成立していて、現代社会においては一見それぞれに対蹠的で独立しているように見えるが、実際にはひとつの鍵概念によって両者は関係を結んでいる間柄なのである。

この「広義の労働」「狭義の労働」という表現は、内山節によったものである。たとえばこれを説明するうえで内山は、「稼ぎ」と「仕事」という語を使っている。氏が訪れるようになったとある村では、村人たちが口にするこの「稼ぎ」と「仕事」という語が異なる意味合いで使われていた。村人が「稼ぎ」に行くというときには「賃労働に出かける」「お金のためにする仕事」に行くという意味であり、またそれは「しないですむのならその方がいい仕事」でもあった。一方で「仕事」と表現されるものは、「人間的な営み」であった。たとえば「山の木を育てる仕事」「山の作業道を修理する仕事」「畑の作物を育てる仕事」「自分の手で家や橋を修理する仕事」「寄合いに行ったり祭りの準備に行く仕事」といった「山村に暮らす以上おこなわなければ自然や村や暮らしが壊れてしまうような諸々の行為」を指していた¹⁹。つまり「貨幣のためにする労働は稼ぎ」であり、「使用価値をつくる労働が仕事」ということになり、前者のいわゆ

る「自らの労働力を商品として売る行為」「収入と結びついた労働」を「狭義の労働」、対して後者の「収入に結びつくかどうかを問わ」れずに「人間が生きていくうえでおこなわれなければならない諸々の行為」を「広義の労働」と呼んでいる²⁰。

では「広義の労働」を踏まえると、なぜ偏向的な「労働観」にならずに済むのか。先に「広義の労働」とは、労働と生活の未分化な暮らしであると述べたが、ここでいう労働と生活とはどのようなものか。それを説明するために再度内山の言葉を引用しようと思う。

「自然は自然科学が対象にしてきたような客観的な体系としての自然と、人間の主体との関係のなかで成立している自然との重なり合いのなかにつくられているのである。後者の自然は人間と交通しつづけている自然であり、労働をとおして人間と結ばれた自然である²¹」

ここで氏は自然というものが主客二重構造のものであり、前者の自然とは唯物論者のいうところの秩序にしたがって動くいわゆる機械論的な物体観に則った対象としての自然、対してもう一方の自然とりわけ現象のなかに内在し人間とのかかわりのなかで成立する自然は、自然と人間の両者間において交通の成立する関係性、すなわち人間による労働というはたらきかけによって関係性を結んだものであると言っている。これは、先述の「スピリチュアリティ」や「日本的霊性」における究極的な到達点とみなされる世界や自然といったものとの一体化や神秘的なつながりを体感するための前提として、自然と人間との第一次的なつながりとなる労働つまり「広義の労働」というのはたらきかけが作用すると解釈することもできる。すなわち、「スピリチュアリティ」「人生目的」「人生観」と「仕事」「仕事目的」「労働観」との連関を考察するためには、双方に貫通する鍵概念となる「自然とのかかわり」を考えずして結論たりえないということである。したがって、「自然とのかかわり」が希薄となる傾向のある「狭義の労働」についてのみで暫定的な「労働観」を言語化しようとする、どうしても資本性社会という限定された領域

内での価値観で判断せざるをえなくなるということなのである。これが偏りの生じる原因となるのである。資本主義がもたらす「労働疎外」のごとく、現代の「狭義の労働」自体は人間に幸せをもたらすものでなく疎外や疎遠しか生み出さないということであれば、その「狭義の労働」のみににおいて「労働観」を構築させるほど浅膚なことはないであろう。否、「統合的ライフ・プランニング」という「全体性」によってキャリアというものをネットワークしようとする概念においては、なによりも該当しないものであるといえよう。

これを少し具体的な問題で考えてみようと思う。商品経済的活動としての「狭義の労働」において、兵器製造に従事する者が、倫理的思想においてその労働が人類の恒久的平和に資するものでないことで「仕事」と「霊性」、「仕事」と「思想」の間でどのように均衡を保つことができるのかで悩むといった場合、「仕事」か「霊性」か、すなわち「仕事の意味、目的」を取るかそれとも「人生の意味、目的」を選択するのかという、二項対立による一元的な結着を求めることでその内的な重圧を解消することができるであろうか。もちろん、個人の経済的手段としての「仕事」によってそのような倫理的負担を負わずに済むものに変えるという「狭義の労働」だけに着目して解決を図ることができないでもない。しかし実際的には家族集団における経済基盤となる「仕事」を変更することは、それほど容易なことではない。なぜならば、主体のみの決断だけでことは成しえないからである。他にも環境や生態系を破壊することを前提としなければ成立しない「仕事」などにおいても、この「仕事」と「霊性」、「生産経済」と「倫理」という二項によるジレンマが生じうことは想像に易いことである。

たしかにこれらは極端なケースかもしれない。しかし、この「仕事」と「霊性」の連関によるライフ・プランニングという目的を勘案するときには、決して避けて通ることのできない問題であり、だからこそ「仕事」と「霊性」の連関においてとらえる必要があるということなのである。ここ

で生じる制度矛盾はこの労働の意味、目的の複数化によるものと考えられる。つまり「狭義の労働」において、それが賃金を得るための労働、すなわち生活のための労働であるという意味と、自己実現のための労働という意味を矛盾なく成立させることがほぼ不可能であるにもかかわらず、その解決法を見つけようと「狭義の労働」の範疇内において躍起になることが問題の根源にある。そこでこの矛盾解消のために労働の精神的な意味、目的を「広義の労働」に求めることが、その解決に近づくひとつの方法なのではないかと考えたいのである。別言すれば「狭義の労働」での倫理的苦悩を、「広義の労働」において緩和するというつながりでとらえるのである。「広義の労働」とは、内山にしたがえば労働過程における自然と人間との精神的な交通ということであり、それは自然哲学ということになるのだが、その交通において自らの「人生の意味、目的」が「対自然」「対人間」関係においてどのようなものを求めているのか、どのような価値観を底流させるべきなのかを思惟することなのである。そしてそれこそが、「スピリチュアリティ・霊性」という「人生の意味、目的」の思惟ということになるのではないだろうか。

VI 結

一定の宗教のドグマに基づいて行動する国民性を基盤とした米国において築かれたILP概念における「スピリチュアリティ」では「宗教と区別して考えることが重要」とするのに対して、宗教的信念がほぼ意識的でない日本における「霊性」では「宗教性を究極的に追究した果てに日常に行き着く」というように、信仰、宗教というものがその背後に暗黙のうちに存在するという構造となっており、その「宗教性」において「スピリチュアリティ」と「霊性」を比較したときには対立構造となっていることが興味深いものであった。

これには二つの可能性が考えられる。一は「スピリチュアリティ」と「霊性」という概念を思惟した人物の「宗教性」の高さの違い。二は宗教についての一定下の理解がある国民だからこそ、そ

の宗教、信仰というもののへの慎重な構えが宗教性の深化と同時に確立されていく一方で、社会通念としての信仰（正月の初詣、寺院における葬儀など）とは異なり、個々人の信仰としての宗教自体が日常から剥離されている国民には信仰というもののへの慎重な構えがつくられないことがない。その結果、動もするとまるで他人事のように「宗教」という語を持ち出すことができる可能性である。しかし、一見そのような「宗教性」への対立構造が存在するものの実はそれは非常に表層的なステージでの異質性であって、本質的には「労働」とおとしての自然との一体化、世界との融合を究極のステージ、すなわち目標としていることについては本稿で推察してきたように ILP「スピリチュアリティ」と「日本的霊性」とはほとんど同根のものにとらえることが可能であると考えられる。つまり自然哲学的に「スピリチュアリティ」と「日本的霊性」とを捉えた場合、それはともに「広義の労働」「自然と人間の交通」ということとなり、言い換えればその「広義の労働」を思惟することが、「スピリチュアリティ」と「日本的霊性」という概念において「人生の意味、目的」を探索することと同義となるということである。そして「スピリチュアリティ」「霊性」が「広義の労働」と同義である以上、これを考慮せずに成立するキャリア理論というものは、「自然と人間のかかわり」という背景をもちえないものとなり、それは本来の「労働」というものが含む要素から疎隔された極めて狭い範疇においてのそれとなる。よってキャリア・ディベロップメントやライフ・プランニングにおいて、「スピリチュアリティ＝霊性」というアプローチを加えることの可否はここにおいて自明のことと思えるのである。

注

- ¹ サニー・S・ハンセン『キャリア開発と統合的ライフプランニング』26-28頁 福村出版、2013
- ² 前掲書（S・ハンセン）41頁
- ³ 前掲書（S・ハンセン）250-251頁
- ⁴ 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』溪水社、2003
- ⁵ 鈴木大拙『日本的霊性』 岩波書店、1972
- ⁶ 前掲書（鈴木）47頁
- ⁷ 前掲書（鈴木）78頁
- ⁸ 前掲書（鈴木）16-17頁
- ⁹ 宗教学者であり浄土真宗本願寺派如来寺の住職でもある釈徹宗は、「霊性」は「共鳴盤」であり、「その共鳴盤は誰もが内蔵しているけれど、何かに共振して振動しないことには機能しない。振動しないとその共鳴盤があることにも気がつかない。しかし、共鳴盤が振動している人や場と出会うと、自分の霊性が共振し始め」る。また、「霊性は「宗教の源泉」みたいなもの」であり「それは宗教」のみならず「科学やアートなどの源泉でもある。この源泉を汲み上げる装置として、仏教やキリスト教のような体系がある」と解釈している。（内田樹、釈徹宗『日本霊性論』177-178ページ NHK出版、2014）
- ¹⁰ ちなみに大拙は『日本的霊性』のなかで、それを説明する際に度々「霊性的直覚」という語を用いるのだが、それはつまり「日本的霊性」における真は概念にあるのではなく直観によって開かれるという立ち位置と考えているということである。これは実に東アジア的哲学観であるといえる。
- ¹¹ 前掲書（鈴木）195頁
- ¹² 厳密には、妙好人とは浄土系信者に限らず念仏者を讃える呼称であり、『観無量寿経』を踏まえながら唐代の僧が念仏者のことを「好人、妙好人、上上人、希有人、最勝人」という五種によって讃嘆した。
- ¹³ 前掲書（内田、釈）
- ¹⁴ W・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』 岩波書店、1969

¹⁵ 渡植彦太郎『仕事暮らしをこわす』35頁 農山漁村文化協会, 1986

¹⁶ この価値化されえないはずの労働が労働力として価値化され、結果商品化されることによって、「労働の疎外」が現出することになるというのがマルクスの主張である。

¹⁷ 内山節は「労働の精神的力能を労働者が資本家に奪われるという」ことをさらに進めて「自然と人間の交通主体が、本来ならその交通を媒介するだけのものであるはずの生産過程のシステムに移行し、そのことによって自然と人間の交通

＝労働過程のなかから労働主体が剥離される」とし、これを労働の疎外という曖昧な言葉でなく「労働の主体剥離」と表現している。(『自然と人間の哲学』169-170頁 岩波書店, 1988)

¹⁸ K・マルクス『経済学・哲学草稿』87-88頁 岩波書店, 1964

¹⁹ 内山節『自然と人間の哲学』12頁 岩波書店, 1988

²⁰ 前掲書(内山)12-15頁

²¹ 前掲書(内山)20頁